戦国策巻第五

秦三

六十九、薛公為魏謂魏冉曰

薛公、魏の為に魏冉に謂いて曰く、「文聞く、秦王、呂禮（秦の人であるが、このときは斉の相）を以て齊を収め以て天下を濟（なす）さんと欲す、と。君必ず輕からん。齊・秦相い聚り以て三晉に臨まば、禮必ず并せて之に相たらん、是れ君、齊を収め以て呂禮を重くするなり。齊、天下の兵を免れば、其の君を讎とすること必ず深からん。君、秦王に勸めて弊邑（魏）をして齊を攻むるの事を卒えしめんには如かず。齊破れば、文請う、得たる所を以て君を封ぜん。齊破れば晉強からん。秦王、晉の強きを畏るるや、必ず君を重んじ以て晉を取らん。齊、晉に弊邑を予えて、秦を支うる能わずんば、晉、必ず君を重んじ以て秦に事えん。是れ君、齊を破り以て功を為し、晉を挾（操を挾に改める）み以て重きを為すなり。齊を破りて封を定めば、秦・晉皆な君を重んず。若し齊、破れず、呂禮復た用いられば、子必ず大いに窮せん。」

七十、秦客卿造謂穰侯

秦の客卿造、穰侯に謂いて曰く、「秦、君を封ずるに陶を以てし、君に天下（三晉）を藉すこと數年なり。齊を攻むるの事成らば、陶は萬乘と為り、小國の長として、率いて以て天子に朝し、天下必ず聽かん。五伯の事なり。齊を攻むること成らずんば、陶は鄰恤（鄰は隣の国で斉のこと、恤は患い。斉に攻められる患い）為れば、之に據る莫からん。故に齊を攻むるの陶に於けるや、存亡の機なり。君、之を成さんと欲せば、何ぞ人をして燕の相國に謂いて曰わしめざる。『聖人、時（時勢）を為すこと能わず。時至れば失わず。舜、賢なりと雖も堯に遇わざるや、天子と為るを得ず。湯・武、賢なりと雖も、桀・紂に當らずんば、王たらざりしならん。故に舜・湯・武の賢を以てすら、時に遭わずんば帝王たるを得じ。今（札記：「令」の字、鮑本は「今」に作る）、齊をむるは、此れ君の大時なるのみ。天下の力に因りて、讎國の齊を伐ち、惠王の恥に報いて、昭王の功を成し、萬世の害を除くは、此れ燕の長利にして、君の大名なり。詩（札記：「書」は鮑「詩」に作る）に云う、德を樹つるは滋（ます）す（多く施す）に如くは莫し、害を除くは盡くす（根本を断ち切る）に如くは莫し、と。吳、越を亡ぼさず、越、故に吳を亡ぼせり。齊、燕を亡ぼさず、燕、故に齊を亡ぼせり。齊、燕に亡ぼされ、吳、越に亡ぼされしは、此れ疾を除くに盡くさざるのみ（札記：呉氏正に曰く、「以」「已」の字通ずること或り、上句に属す）。此の時、君の功を成し、君の害を除くに非ずんば、秦卒かに他事有りて齊に従わんに、齊・秦（札記：鮑は「趙」を改めて「秦」と為す）、合せば、其の君を讎とすること必ず深からん。君の讎を挾みて以て燕を誅めば、後に之を悔ゆと雖も、得可からざらんのみ。君、燕の兵を悉くして疾く之を從（札記：鮑は「僭」を改めて「攻」と為す、呉氏正に曰く、字誤れり、當に「從」に作るべし）わ

しめば、天下の君に從わんこと、父子の仇を報ゆるが若くならん。誠に能く齊を亡ぼさば、君を河南に封じて、萬乘と為し、途を中國に達し，南は陶と鄰を為し，世世患い無からしめん。願わくは君が志を斉を攻むるに專らにして、他の慮り無からんことを。」

七十一、魏謂魏冉

魏の為（札記：鮑は「魏」の上に「為」の字を補う）に魏冉に謂いて曰く、「公、東方の語を聞けりや。」曰く、「聞かざるなり。」曰く、「辛張陽毋澤（諸説あり、辛・張陽・毋澤の三人、辛張陽・毋澤の二人、辛張・陽毋澤の二人等、何れが正なるかは定かでない）の魏王（昭王）・薛公（田文）・公叔（韓の相）に説くや、曰く、『臣戰うときは、主（先君の位牌）を載せ國に契り以て王と約す。必ず患い無けん。若し之を敗る者有らば、臣請う、領（くび）を挈（うつ）たん。』然れども臣、患有るなり。（札記：「夫楚王之以其臣請挈領然而臣有患也」、鮑はこの十六字を衍とす）夫れ楚王の其の國を以て冉に依るや、而して臣の主に事にあらんとす、此れ臣の甚だしき患なり。今、公、東して因りて楚に言わば、是れ張儀の言をして禹のごとく為らしめて、務めて公の事を敗るなり。公、如かず、公の國に反り、楚に德して、薛公が公の為にするを觀、三國の秦に求めて得る能わざる所の者を觀、請うて以て三国に號して、以て自ら信にし、張儀と澤との薛公に得る能わざる所の者を觀、而して公、之を請いて以て自ら重くせんには。」

七十二、謂魏冉曰和不成

魏冉に謂いて曰く、「和成らずんば、兵必ず出で、白起なる者、且に復た將たりて戰わんとす。勝たば必ず公を窮めん。勝たずんば、必ず趙を事とし（趙との講和）公に従わん。公又輕からん（講和の主導権が白起に移り、魏冉の権勢が軽んぜられる）、公、多きのこと毋からんには若かず、則ち疾く到らん（公としては講和の条件を多くしないほうが良い、そうすれば趙は早速入朝してくるでしょう、と解釈するのが一般的であるが、必ずしも定かでない）。」

七十三、謂穰侯曰

穰侯に謂いて曰く、「君の為に封を慮るに、陶に若くは莫し（札記：丕烈案ずるに、「除」は乃ち「陶」の字の誤りなり、句絶つ、「若」の上に當に「莫」の字有るべし）。宋の罪重く、齊怒ること深（札記：丕烈案ずるに、「須」は即ち「深」の字の誤りなり、句絶ゆ）し。亂宋を残伐し、強齊に德して、身の封を定む。此れ亦た百世の一（札記：今本「時」の上に「一」の字有り）時なるのみ。」

七十四、謂魏冉曰楚破秦

魏冉に謂いて曰く、「楚、秦を破らば、齊と縣衡（勢力が相等しいこと）すること能わじ。秦は三世、節（わりふ、手形、ここでは節を持った使者）を韓・魏に積みて、齊の德新たに加わる（姚校：「與」は一に「焉」に作る）。齊・秦交々争い、韓・魏、東に聽かば、則ち秦伐たれん。齊は東國の地、方千里を有ち、楚は九夷を苞み、又方千里、南に符離の塞有り、北に甘魚の口（河口の名）有り。宋・衛を權縣（秤にかける）するに、宋・衛は乃ち阿・甄に當らんのみ。利は千里の者二有り、富、越隷を擅にす、秦烏んぞ能く齊と韓・魏を縣衡せん。楚（この一字補う）は方城の膏腴の地を支分（分割）して、以て鄭に薄（せまる）り、兵休みて復た起こらば、以て秦を傷るに足らん。必ず齊を待たじ。」

七十五、五國罷成皐

五國、成皐に罷る。秦王、成陽君の為に韓・魏に相たらんことを求めんと欲す。韓・魏聽かず。秦の太后、魏冉の為に秦王に謂いて曰く、「成陽君、王の故を以て、窮しみて齊に居る。今、王、其の達（栄達）を見て之を收む。亦た能く其の心に翕（あう）わんか。」王曰く、「未だしなり。」太后曰く、「窮して收められず。達して之に報いん。恐らくは王の用を為さざらん。且つ成陽君を収むるは、韓・魏を失うの道なり。」

七十六、范子因王稽入秦

范子（范雎）、王稽に因り秦に入り、書を昭王に獻じて曰く、「臣聞く、明主、正（まつりごと）に蒞（のぞむ）むや、功有る者は賞せざるを得ず、能有る者は官せざるを得ず、勞大なる者は其の祿厚く、功多き者は其の爵尊く、能く衆を治むる者は其の官大なり。故に不能の者は敢て其の職に當らず、能ある者も亦た蔽隠するを得ず、と。臣の言を以て可と為さしめば、則ち行いて益々其の道を利せよ。若し將に行わざらんとせば、則ち久しく臣を留むること為す無きなり。語に曰く、『人主（凡庸な主）は愛する所を賞して、惡む所を罰す。明主は則ち然らず、賞は必ず有功に加え、刑は必ず有罪に斷ず。』今、臣の胸は以て椹質（チン・シツ、椹も質も首切りの台）に當つるに足らず、要（腰）は以て斧鉞を待つに足らず。豈に敢て疑事を以て王に嘗試（こころみる）せんや。臣を以て賤しと為して臣を輕辱すと雖も、獨り臣を任ずる者の、後に王に前を反覆する無きを重んぜざらんや（問題のある文章である。「獨り臣を任ずる者を重んぜずは、後に王の前に反覆無からんや」と読むのはどうであろうか）。臣聞く、周に砥厄（シ・ヤク、宝玉の名）有り、宋に結綠（宝玉の名）有り、梁に懸黎（宝玉の名）有り、楚に和璞（カ・ハク、宝玉の名）有り。此の四寶は，工の失せし所なり（良工が鑑定を誤ったもの）、而るに天下の名器と為る。然らば則

ち聖王の棄つる所の者は、獨り以て國家を厚くするに足らざらんか。臣聞く、善く家を厚くする者は、之（人材）を國より取り、善く國を厚くする者は、之を諸侯より取る、と。天下に明主有れば、則ち諸侯、擅に厚くするを得ず。是れ何の故ぞや。其の栄を凋（しぼむ）ますが為なり。良醫は病人の死生を知り、聖主は成敗の事に明らかなり、利あらば則ち之を行い、害あらば則ち之を舍て、疑わしきは則ち少しく之を嘗む。堯・舜・禹・湯復た生ると雖も、改むる能わざるのみ。語の至れる者は、臣、敢て之を書に載せず。其の淺き者は又聽くに足らざるなり。意者うに、臣愚かにして王の心に闔（あう）わざらるか。亡（姚校：「已」は銭、「亡」に作る。むしろと訓ず）ろ其の臣を言う者は、將た賤しくて聽くに足らざるか。是くの若くに非ずんば、則ち臣の志、願わくは少しく遊觀の間を賜り、足下を望見して之を入れん。」書上る。秦王之を說ぶ。因りて王稽に謝して（姚校：一に「說」の字無し）、人をして車を持して之を召さしむ。

七十七、范睢至秦

范睢至る。秦王、庭に迎えて、范睢に謂いて曰く、「寡人、宜しく身を以て令を受くべきや久し。今者、義渠の事急にして、寡人日に自ら太后に請う。今、義渠の事已み、寡人乃ち身を以て命を受くるを得ん。躬ら竊かに不敏（不才）なるに閔然（うれえる）たり。敬んで賓主の禮を執らん。」笵睢、辞讓す。是の日范睢の見ゆるを見る者、色を變じ容を易えざる者無し。秦王、左右を屏く。宮中虛にして人無し。秦王跪きて請いて曰く、「先生、何を以てか幸いに寡人に教うる。」范睢曰く、「唯唯。」間く有りて、秦王復た請う。范睢曰く、「唯唯。」是くの若くする者（こと）三たび。秦王跽きて曰く、「先生、幸いに寡人に教えざるか。」范睢謝して曰く、「敢て然るに非ざるなり。臣聞く、始めの時、呂尚の文王に遇うや、身は漁父と為りて渭陽の濱に釣せしのみ。是くの若きは、交り疏かりければなり。已に一たび說くや、立てて太師と為し、載せて與に俱に歸るは、其の言深かりければなり。故に文王果して功を呂尚に収め、卒に天下を擅ままにして身は立ちて帝王と為る。即使（もし）、文王、呂望を疏んじて、與に深く言わずんば、是れ周に天子の德無くして、文・武は與に其の王（王業）を成す無かりしならん。今、臣は羈旅の臣なり。交りは王に疏く、而して願いて陳ぶる所は、皆君の臣（札記：上の「之」の字を鮑本は「臣」に作る）の事を匡し、人の骨肉の間に處せんとす。以て臣の陋忠（ロウ・チュウ、己の忠誠を謙遜して言う言葉）を陳ぶるを願えども、未だ王の心を知らざるなり。王の三たび問いて對えざる所以は是れなり。臣、畏るる所有りて敢て言わざるに非ざるなり。今日之を前に言いて、明日誅に後に伏するを知るも、然も臣、敢て畏れざるなり。大王信に臣の言を行わば、死すとも以て臣が患いと為すに足らず、亡ぶとも以て臣が憂いと為すに足らず、身に漆して厲と為り、髪を被りて

狂と為るも、以て臣が恥と為すに足らじ。五帝の聖なるも死し、三王の仁なるも死し、五伯の賢なるも死し、烏獲の力なるも死し、奔・育（孟賁と夏育、共に晋の武王に仕えた力士）の勇なるも死す。死なる者は、人の必ず免れざる所なり。必然の勢いに處し、以て少しく秦に補う有る可ければ、此れ臣の大いに願う所なり。臣、何をか患えんや。伍子胥、櫜載せられて昭關を出で、夜行きて晝伏し、蔆水に至りて、以て其の口に餌する無し。坐行蒲服して、食を吳の市に乞い、卒に吳國を興し、闔閭を霸と為せり。臣をして謀を進むるを得ること伍子胥の如くならしめば、之に加うるに幽囚を以てし、終身復た見えずとも、是れ臣の說の行わるるなり。臣何をか憂えんや。箕子・接輿は、身に漆して厲と為り、髪を被りて狂と為りしも、殷・楚に益無かりき。臣をして行いを箕子・接輿に同じうし、身に漆し以て賢とする所の主を補う可きを得しめば、是れ臣の大榮なり。臣又何ぞ恥んや。臣の恐るる所は、獨り臣の死するの後、天下、臣の忠を盡くして身の蹶（たおれる）るるを見るや、是を以て口を杜（ふさぐ）ぎ足を裹（つつむ）みて、肯て秦に即（いたる）る莫からんことを恐るるのみ。足下、上は太后の嚴を畏れ、下は姦臣の態に惑い、深宮の中に居り、保傅の手を離れず、終身闇惑にして、與（ために）に姦を照らすもの無く、大にしては、宗廟滅覆し、小にしては、身以て孤危ならん。此れ臣の恐るる所のみ。夫の窮辱の事，死亡の患の若きは、臣、敢て畏れざるなり。臣死して秦治まらば、生くるに賢（まさる）らん。」秦王跽きて曰く、「先生、是れ何の言ぞや。夫れ秦國は僻遠にして、寡人は愚にして不肖なり。先生乃ち幸に此に至る、此れ天、寡人を以て先生を慁（コン、けがすと訓じ、もったいなくも苦労をかけるの意）して、先王の廟を存するなり。寡人、命を先生に受くるを得ば、此れ天の先王に幸いして、其の孤を棄てざる所以なり。先生奈何なれば言、此くの若きや。事、大小と無く、上は太后に及び、下は大臣に至るまで、願わくは先生悉く以て寡人に教えよ。寡人を疑う無かれ。」范雎再拜し、秦王も亦た再拜す。范雎曰く、「大王の國、北には甘泉・谷口有り、南は涇・渭を帯び、隴・蜀を右にし、關・阪を左にす。戰車は千乘、奮擊は百萬あり。秦の卒の勇、車騎の多きを以て、以て諸侯に當らば、譬えば韓盧（戦国時代に韓から出た黒毛の俊犬）を馳せて蹇兔（ケン・ト、足の悪い兎）を逐うが若きなり。霸王の業致す可し。今、反って關（札記：鮑は下に關の字を補う）を閉じて敢て兵を山東に窺わせざる者は、是れ穰侯の國の為に謀ること不忠にして、大王の計、失する所有ればなり。」王曰く、「願わくは計を失する所を聞かん。」雎曰く、「大王、韓・魏を越えて強齊を攻むるは、計に非ざるなり。少しく師を出ださば則ち以て齊を傷るに足らず、之を多くせば則ち秦に害あり（秦の国力を消耗させて害を及ぼす）。臣、意うに、王の計、少しく師を出だして、韓・魏の兵を悉くさんと欲するは、則ち不義なり。今、與國の親む可からずを見つつ、人の國を越えて攻むるは、

可ならんや。計に疏し。昔者、齊人、楚を伐ち、戰い勝ちて、軍を破り將を殺し、再び千里を辟（ひらく）きて、膚寸の地も得る無かりしは、豈に齊の地を欲せざりしならんや。形、有つ能わざりければなり。諸侯、齊の罷露、君臣の親まざるを見て、兵を舉げて之を伐つ。主辱められ軍破れて、天下の笑と為れり。然る所以の者は、其の楚を伐ちて韓・魏を肥せしを以てなり。此れ所謂賊に兵を藉して盗に食を齎す者なり。王、遠く交りて近く攻めんに如かず。寸を得れば則ち王の寸、尺を得るも亦た王の尺なり。今、此れを舍てて遠く攻む。亦た繆らずや。且つ昔者，中山の地、方五百里、趙獨り之を擅にし、功成り、名立ち、利附く（札記：鮑は「則」を改めて「焉」と為す)。天下能く害するもの莫かりき。今、韓・魏は中國に之れ處りて、而も天下の樞なり。王若し霸たらんと欲せば、必ず中國にして以て天下の樞為るに親しんで、以て楚・趙を威せ。趙強くば則ち楚附き、楚強くば則ち趙附く。楚・趙附かば則ち齊必ず懼る。懼れば必ず辭を卑くし幣を重くし以て秦に事えん。齊附かば、韓・魏、虚（廃墟）とす可きなり。」王曰く、「寡人、魏に親しまんと欲すれども、魏、變多きの國なり。寡人、親しむ能わず。請いて問う、魏に親しむには奈何にせん。」范睢曰く、「辭を卑くし幣を重くして以て之に事えよ。不可ならば、地を削りて之に賂え。不可ならば、兵を舉げて之を伐て。」是に於いて兵を舉げて邢丘を攻む。邢丘拔けて魏、附かんことを請う。（范睢）曰く、「秦・韓の地形、相い錯ること繡の如し。秦の韓有るは、木の蠹（ト、きくいむし）有り、人の心腹を病むが若し。天下に變有らば、秦に害を為す者は、韓よりも大なるは無けん。王、韓を収むるには如かず。」王曰く、「寡人、韓を収めんと欲すれども、聽かずんば、之を為すこと奈何にせん。」范睢曰く、「兵を舉げて滎陽を攻めば、則ち成皋の路は通ぜじ。北のかた太行の道を斬らば、則ち上黨の兵は下らじ。一挙にして滎陽を攻めば、則ち其の國斷たれて三と為らん。夫れ（札記：丕烈案ずるに、『史記』に「夫韓」に作るを是と為す）韓必ず亡びんことを見ば、焉んぞ聽かざるを得ん。韓聽かば霸の事成る可きなり。」王曰く、「善し。」范睢曰く、「臣、山東に居りしとき，齊の内に田單有るを聞くも、其の王あるを聞かず。秦に太后・穰侯・涇陽・華陽・高陵（『史記』により高陵を補う）有るを聞くも、（札記：丕烈案ずるに、～「其」の字を衍す）王有るを聞かざりき。夫れ国を擅にする之を王と謂い、能く利害を專にする之を王と謂い、殺生の威を制する之を王と謂う。今、太后は行いを擅にして顧みず、穰侯は出使して報ぜず、涇陽・華陽は擊斷（法律を恣にして処分する）して諱むこと無く、高陵は進退して請わず（札記：呉氏補に曰く、～『史』は「高陵進退不請」の一句有り)。四貴備りて國危うからざる者は、未だ之れ有らざるなり。此の四者の下為り、乃ち所謂王無きのみ。然らば則ち權焉んぞ傾かざるを得ん、而して令焉んぞ王從り出づるを得んや。臣聞く、善く國を為むる者は、内は其の威を固めて、外は其の

權を重くす、と。穰侯の使者なるや、王の重きを操り、諸侯を決裂し（諸侯の秦に対する合従を決裂させる）、符を天下に剖き、敵を征し國を伐ち、敢て聽かざる莫し。戰い勝ち攻めて取らば、則ち利は陶に歸し、國は弊れ、諸侯に御せらる。戰いて敗れば、則ち怨み百姓に結び、而して禍は社稷に歸す。詩に曰く、『木の實、繁れば其の枝を披（さく）き、其の枝を披けば其の心（幹）を傷る。其の都を大にすれば、其の國を危くし、其の臣を尊べば、其の主を卑しくす。』淖齒、齊の權を管り、閔王の筋を縮（ぬく）きて、之を廟梁に縣け、宿昔（一晩）にして死せり。李兌、趙に用いられて、食を主父に減じて、百日にして餓死せり。今、秦，太后・穰侯、事を用い、高陵、涇陽・華陽（姚校：曾は下に「華陽」の二字有り）之を佐け、卒に秦王を無す。此も亦た淖齒・李兌の類なり（札記：「已」を鮑本は「也」に作る）。臣、今、王の獨り廟朝に立つを見る。且つ臣將に後世の秦の國を有たんとする者は、王の子孫に非ざらんことを恐れんとするなり。」秦王懼れ、是に於いて乃ち太后を廢し、穰侯を逐い、高陵を出だし、涇陽・華陽（札記：呉氏補に曰く、『史』に「華陽」の二字有り）を關外に走らす。昭王、范雎に謂いて曰く、「昔者、齊公、管仲を得し時、以て仲父と為せり。今、吾、子を得、亦た以て父と為さん。」

七十八、應侯謂昭王

應侯、昭王に謂いて曰く、「亦た恒思（地名）に神叢有るを聞けるか。恒思に悍少年（荒々しい少年）有り。叢と博せんことを請いて曰く、『吾、叢に勝たば、叢、我に神を籍すこと三日なれ、叢に勝たずんば、叢、我を困しめよ。』乃ち左手に叢の為に投じ、右手に自ら為に投ず。叢に勝ち、叢、其の神を籍す。三日して、叢、往きて之を求む。遂に歸さず。五日にして叢枯れ、七日にして叢亡びぬ。今、國は王の叢なり、勢は王の神なり。人に籍すに此を以てせば、危き無きを得んや。臣、未だ嘗て指の臂よりも大に、臂の股よりも大なるを聞かず。若し此れ有らば、則ち病必ず甚だしからん。百人、瓢を輿いて趨るは、一人持ちて走るの疾きには如かず。百人誠に瓢を輿わば、瓢は必ず裂けん。今、秦國は、華陽、之を用い、穰侯、之を用之い、太后、之を用い、王も亦た之を用う。瓢の器為るに稱わずんば、則ち已むのみ（どうでもよい）。瓢の器為るに稱わば、國は必ず裂けん。臣之を聞く、木の實繁ければ、枝必ず披（さける）け、枝の披くれば、其の心を傷る。都大なれば其の國を危うくし、臣強ければ其の主を危うくす、と。其れ今（「令」を「今」に改める）、邑中の斗食（一斗の微禄を食むもの）以上自り、至尉・內史及び王の左右に至るまで、相國の人に非ざる者有らんや。國に事無くば則ち已まん。國に事有らば、臣必ず王の獨り庭に立つを聞見せん。臣竊かに王の為に恐る、　恐らくは萬世の後に國を有つ者は、

王の子孫に非ざらんことを。臣聞く、古の善く政を為すや、其の威、内に扶け、

其の輔、外に布き、而（札記：今本は「四」を「而」に作る）して治まり、政亂れず逆わず。使者は道を直くして行い、敢て非を為さざりき、と。今太后の使者（穰侯を指す）諸侯を分裂して、符、天下に布き、大國の勢いを操り、強いて兵を徴し、諸侯を伐ち、戰いて勝ち攻めて取れば、利は盡く陶に歸す。國の幣帛、竭（ことごとく）く太后の家に入り、竟内の利は、華陽に分移せらる。古の所謂、主を危うくし國を滅ぼすの道は、必ず此れ從り起らん。三貴、国を竭くし以て自ら安んず。然らば則ち令何ぞ王從り出づるを得ん。權何ぞ分かるる毌きを得ん。是れ（札記：鮑は「我」の字を衍とす）王果して三分の一に處るなり。」

七十九、秦攻韓圍陘

秦、韓を攻め、陘を囲む。范睢、秦の昭王に謂いて曰く、「人を攻むる者有り、地を攻むる者有り。穰侯十たび魏を攻めて傷るを得ざるは、秦弱くして魏強きに非ざるなり。其の攻むる所の者、地なればなり。地は、人主の甚だ愛する所なり。人主は、人臣の為に死するを楽（ねがう）う所なり。人主の愛する所を攻め、死を樂う者と闘う。故に十たび攻めて勝つ能わざるなり。今、王、將に韓を攻めんとして陘を囲む。臣願わくは王の獨り其の地を攻むる毌くして、其の人を攻めんことを。王、韓を攻め陘を囲むに、張儀を以て言（口実）と為せ。張儀の力多ければ、且に地を削りて以て自ら王に贖わんとす。幾（豈と同じ）に地を割きて韓盡きざらんや。張儀の力少ければ、則ち王、張儀を逐うて、更めて張儀に如かざる者と市せよ。則ち王の韓に求むる所の者は、（札記：今本は「言」を「盡」に作る）盡く得可からん。」

八十、應侯曰鄭人謂玉未理者璞

應侯曰く、「鄭人は玉の未だ理めざる者を璞（ハク）と謂い、周人は鼠の未だ腊（セキ、ほじし）にせざる者を朴（ハク）と謂う。周人、朴（札記：鮑は「璞」を改めて「朴」と為す）を懐きて鄭の賈に過りて曰く、『朴を賣わんと欲するか。』鄭の賈曰く、『之を欲す。』其の朴を出だす、之を視る、乃ち鼠なり。因りて謝して取らず。今、平原君、自ら以て賢なりとし、名を天下に顯わす。然れども其の主父を沙丘に降して之を臣とす。天下の王尚ほ猶ほ之を尊ぶ。是れ天下の王、鄭の賈の智に如かざるなり。名に眩みて其の實を知らざるなり。」

八十一、天下之士合從相聚於趙

天下の士、合從して趙に相い聚り、而して秦を攻めんと欲す。秦の相應侯曰く、

「王憂うる勿かれ。請う、之を廢めしめん。秦、天下の士に於いて、怨有るに非ざるなり。相い聚りて秦を攻むる者は、己の富貴を欲するを以てなるのみ。王、大王の狗を見よ。臥する者は臥し、起つ者は起ち、行く者は行き、止る者は止り、相い與に鬪う者毋し。之に一骨を投ずれば、輕く起ちて相い牙むは、何ぞや。則ち爭意有ればなり。」是に於いて唐雎をして（札記：鮑は「唐」の上に「使」の字を補う）音樂を載せ、之に五千（札記：今本「十」を「千」に作る）金を予えて、武安に居り、高會（盛大な宴会）し相い與に飲ましめ、謂えらく、「邯鄲の人、誰か來りて取る者ぞ。是に於いて其の謀る者には、固より未だ得て予う可からざるなり，其の得て與う可き者には、之を與え、昆弟たれ。公、秦の與（ため）に功を計らんには、金の之く所を問わず，金盡きなば功多からん。今人をして復た五千金を載せて公に随わしめん。」唐雎行き行きて武安に至る。散ずること三千金なること能わずして、天下の士、大いに相い與に鬪えり。

八十二、謂應侯曰君禽馬服乎

應侯に謂いて曰く、「武安君、馬服君を禽にせしか（札記：今本「服」の下に「君」の字有り。丕烈案ずるに、『史記』は「武安君禽馬服子乎」に作る、此の文、「君」の上に脱有り。これにより「君禽馬服乎」を「武安君禽馬服君乎」に改める）。」曰く、「然り。」「又即ち邯鄲を囲まんか。」曰く、「然り。」「趙亡びば、秦王、王たらん。武安君は三公為らん。武安君の秦の為に戰いて勝ち攻めて取る所以の者は七十餘城、南は鄢・郢・漢中を亡ぼし、馬服の軍を禽にして、一甲をだも亡わず。周・呂望の功と雖も、亦た此れに過ぎじ。趙亡びば、秦王、王たらん、武安君、三公為らん、君能く之が下為らんか。之が下為る無からんと欲すと雖も、固より之を得じ。秦嘗て韓の邢を攻めて、上黨に困しむ。上黨の民皆返って趙の為にせり。天下の民，秦の民為るを樂わざるの日固より久し。今、趙を攻めば、北地は燕に入り、東地は齊に入り、南地は楚・魏に入らん。則ち秦の得る所は幾何も無けん（姚校：劉は「不一」を改めて「無幾何」に作る）。故に因りて之を割き、以て武安の功と為す無（札記：呉氏補に曰く、『史』は「無以為」。此の「因」の字は非なり）からんには如かず。」

八十三、應侯失韓之汝南

應侯、韓の汝南を失う。秦の昭王、應侯に謂いて曰く、「君、國を亡う。其れ憂うるか。」應侯曰く、「臣、憂えず。」王曰く、「何ぞや。」曰く、「梁人に東門吳なる者有り。其の子、死して憂えず。其の相室曰く、『公の子を愛するや、天下に有る無し。今、子、死して憂えざるは、何ぞや。』東門吳曰く、『吾嘗て子無し、子無しの時憂えず、今、子死す。乃ち即ち子無きの時と同じきなり。』臣奚

んぞ憂えん。臣も亦た嘗て子為り。子為りし時憂えず。今、汝南を亡う。乃ち即ち梁の余子（長男以外の子で、部屋住み）為ると同じきなり。臣何為れぞ憂えん。」秦王以て然らずと為し、以て蒙傲に告げて曰く、「今や、寡人、一城が圍まるるも、食して味を甘（うまい）しとせず、臥して席（寝床）を便とせず。今、應侯、地を亡いて、而も、憂えずと、言う。此れ其の情なりや。」蒙傲曰く、「臣請う、其の情を得ん。」蒙傲乃ち往きて應侯に見えて、曰く、「傲、死せんと欲す。」應侯曰く、「何の謂ぞや」曰く、「秦王、君を師とするは、天下聞かざる莫し、而るを況や秦國に於いてをや。今、傲の勢い、秦王の為に將と為り兵を將いるを得たり（札記：「得」の下に鮑本は「為」の字有り。札記：鮑は「為王」を改めて「王為」と為す。この二つの札記により、「今傲勢得秦為王将将兵」を「今傲勢得為秦王為将将兵」に改める）。臣以うに韓の細（小さい国）なるや、顯らかに誅に逆らいて、君の地を奪えり。傲、尚ほ奚んぞ生きん。死するには若かず。」應侯、蒙傲に拝して曰く、「願わくは之を卿に委ねん。」蒙傲以て昭王に報ず。是れ自りの後、應侯、毎に韓の事を言うは、王、聴かざるなり。其の汝南の虜の為にすと以えばなり。

八十四、秦攻邯鄲

秦、邯鄲を攻め、十七月下らず。莊、王稽に謂いて曰く、「君、何ぞ軍吏に賜わざるや（軍の役人に品物を下賜して取り入らないのか）。」王稽曰く、「吾の王に與けるや、人の言を用いじ。」莊曰く、「然らず。父の子に於けるや、令必ず行わるる者と、必ず行われざる者有り。曰く、『貴妻を去れ、愛妾を賣れ。』此れ令の必ず行わるる者なり。因りて曰く、『敢て思う毋かれ。』此れ令の必ず行われざる者なり。守閭（村の門番）の嫗曰く、『其の夕べ、某の懦子（ここでは女性を指す）某の士を内る。』貴妻已に去り、愛妾已に賣れども、而も心に有らず。之に教げんと欲する者は、人の心固より有り。今、君、王に幸せらるると雖も、父子の親に過ぎず、軍吏、賤しと雖も、守閭の嫗よりも卑しからず。且つ君、主を擅にして下を輕んずるの日久し。聞く、三人、虎を成し（三人が虎が出たといえば、信じ難くても、人は信じるものである）、十夫、椎を揉む。衆口の移す所（口裏を合わせる）、翼毋くして飛ぶ、と。故に曰く、軍吏に賜いて之に禮せんには如かず、と。」王稽聽かず。軍吏窮す。果して王稽・杜摯（王稽の副官）を悪するに反を以てす。秦王大いに怒りて、兼ねて范雎を誅せんと欲す。范雎曰く、「臣は東鄙の賤人なり。罪を楚・魏に開き、遁逃して來り奔る。臣、諸侯の援け、親習の故無し。王、臣を羈旅の中より挙げ、事を職らしむ。天下皆臣の身と王の舉とを聞く。今、惑いに遇いて、罪人と心を同じうする或りとして、王、明らかに之を誅せんとす。是れ王の過舉、天下に顯われて、諸侯の議する所と為らん。臣願わくは薬を請いて死を賜わらん。而して恩もて相を以て臣を

葬れ。王必ず臣の罪を失せずして、過舉の名無からん。」王曰：「之れ有り。」遂に殺さずして善く之を遇せり。

八十五、蔡澤見逐於趙

蔡澤、趙より逐われて、韓・魏に入るや、遇々釜鬲を涂（みち）に奪わる。應侯、鄭安平・王稽を任じたるに、皆な重罪を負い、應侯内に慚づと聞き、乃ち西して秦に入る。將に昭王に見えんとして、人をして宣言し以て應侯を感怒せしめて曰く、「燕の客蔡澤は天下の駿雄弘辯の士なり。彼一たび秦王に見えば、秦王必ず之を相として君の位を奪わん。」應侯之を聞き、人をして蔡澤を召さしむ。蔡澤入りて、則ち應侯に揖す。應侯固より快からず、之を見るに及びて、又倨る。應侯因りて之を讓めて曰く、「子常て宣言すらく、我に代りて秦に相たらん、と。豈に此れ有るか。」對えて曰く、「然り。」應侯曰く、「請う、其の說を聞かん。」蔡澤曰く、「吁、君、何ぞ（姚校：劉、一に「君何」に作る）見ることの晩きや。夫れ四時の序、功を成す者は去る。夫れ人生まれて、手足堅強に、耳目聰明にして聖知なるは、豈に士の願う所に非ざるか。」應侯曰く、「然り。」蔡澤曰く、「仁を質とし義を秉り、道を行い、德を天下に施し，天下懷樂敬愛して、以て君王と為さんことを願うは、豈に辯智の期ならざるか。」應侯曰く、「然り。」蔡澤復た曰く、「富貴顯榮にして、萬物を成理し、萬物各々其の所を得て、生命壽長に、其の年を終えて夭傷せず、天下、其の統を繼ぎ、其の業を守り、之を無窮に傳え、名實純粹にして、澤、千世に流れ、之を稱して絶ゆること毌く、天下と與に終るは、豈に道の符にして、聖人の所謂吉祥善事に非ざるか。」應侯曰く、「然り。」澤曰く、「秦の商君・楚の吳起・越の大夫種の若きは、其れ卒に亦た願う可きか。」應侯、蔡澤の己を困しめ以て說かんと欲するを知り、復た曰く、「何為れぞ不可ならん。夫れ公孫鞅は孝公に事え、身を極めて二毌く、公を盡くして私を還ず、賞罰を信にして以て治を致し、智能を竭くし、情素を示し，怨咎を蒙（おかす）し，舊交を欺きて、魏の公子卬を虜にし、卒に秦の為に將を禽にして、敵軍を破り、地を攘くこと千里なり。吳起は悼王に事え、私をして公を害せず、讒をして忠を蔽（おおう）わざらしめ、言は苟くも合うを取らず、行いは苟くも容れらるるを取らず、義を行いて毀譽を顧（姚校：「固」は曾、一に「顧」に作る）みず，必ず主を伯とし國を強くせんとする有りて、禍凶を辭せず。大夫種は越王に事え、主、困辱に離（あう）うも、忠を悉くして解（おこたる）らず、主、亡絕すと雖も、能を盡くして離ず、功多けれども矜らず、貴富なれども驕怠せず。此の三子の若き者は、義の至り、忠の節なり。故に君子は身を殺し以て名を成す。義の在る所は、身死すと雖も、憾悔無し，何為れぞ不可ならんや。」蔡澤曰く、「主聖にして臣賢なるは、天下の福なり。君明にして臣忠なるは、國の福なり。父慈にして子孝に、夫信にし

て婦貞なるは、家の福なり。故に比干は忠なれども、殷を存する能わず。子胥は知なれども、吳を存する能わず。申生は孝なれども、而れども晉惑亂す。是れ忠臣・孝子有りて、國家滅亂するは、何ぞや。明君賢父の以て之に聽く無ければなり。故に天下、其の君父を以て戮辱すと為し、其の臣子を憐れむ。夫れ死を待ちて而る後に以て忠を立て名を成す可くんば、是れ微子は仁とするに足らず。孔子は聖とするに足らず。管仲は大とするに足らざるなり。」是に於いて應侯、善しと稱す。蔡澤、少間を得、因って曰く、「商君・吳起・大夫種は其れ人臣と為りて、忠を盡くし功を致せしは、則ち願う可し。閎夭の文王に事え、周公の成王を輔けたるは、豈に亦た忠ならざるか。君臣を以て之を論ぜば、商君・吳起・大夫種の、其れ願う可きは、閎夭・周公に孰れぞや。」應侯曰く、「商君・吳起・大夫種は若かざるなり。」蔡澤曰く、「然らば則ち君の主、慈仁にして忠に任じ、舊故を欺かざるは、秦の孝公・楚の悼王・越王に孰れぞや。」應侯曰く、「未だ何如を知らざるなり。」蔡澤曰く、「主固より忠臣に親しむこと、秦孝・越王・楚悼に過ぎず。君の主の為に、亂を正し、患を批（はらう）い、難を折き、地を廣め、穀を殖し、國を富まし、家を足し、主を強くし、威、海内を蓋い、功、萬里の外に章るること、商君・吳起・大夫種に過ぎずして、而るに君の祿位は貴盛にして、私家の富は三子に過ぎたり。而るに身退かず。竊かに君の為に之を危ぶむ。語に曰く、『日中すれば則ち移り、月滿つれば則ち虧く。』物盛んなれば則ち衰うるは、天の常數なり。進退・盈縮・變化は聖人の常道なり。昔者、齊の桓公は諸侯を九合し、天下を一匡せしが、葵丘の會に至り、驕矜の色有りて、畔く者九國なり。吳王夫差は天下に敵無く、諸侯を輕んじ、齊・晉を凌ぎ、遂に以て身を殺し國を亡ぼせり。夏育・太史啓（どちらも古の勇者）、叱呼して三軍を駭（おどろく）かす、然るに身は庸夫に死せり。此れ皆至盛に乗じて道理に返（札記：丕烈案ずるに、『史記』は「返」に作る）らざればなり。夫れ商君は孝公の為に權衡を平らかにし、度量を正し、輕重を調え、阡陌を決裂し、民に耕戰を教う。是を以て兵動けば地廣まり、兵休めば國富む。故に秦、天下に敵無く、威を諸侯に立つ。功已に成り、遂に以て車裂せられぬ。楚の地は持戟百萬あり、白起、數萬の師を率い、以て楚と戰い、一戰して鄢・郢を挙げ、再戰して夷陵を焼き、南は蜀・漢を并せ、又韓・魏を越えて強趙を攻め、北は馬服を阬にし、四十餘萬の衆を誅屠して、流血は川を成し、沸聲（人の泣き喚く声）は雷の若く、秦をして帝を業とせしむ。是れ自りの後、趙・楚懾服（シュウ・フク、恐れて屈服すること）し、敢て秦を攻めざるは、白起の勢なり。身ら服する所の者は、七十餘城。功已に成り、死を杜郵に賜う。吳起は楚悼の為に無能を罷（しりぞける）け、無用を廢し、不急の官を損（へらす）し、私門の請いを塞ぎ、楚國の俗を壹にして、南のかた楊越を収（王念孫により、「攻」を「収」に改める。『史記』を証とする）め、北のかた陳・蔡を并せ、横を破り

從を散じ、馳說の士をして其の口を開く所無からしむ。功已に成り、卒に支解せらる。大夫種は越王の為に草を墾（ひらく）き邑を剏（はじめる）め、地を辟き穀を殖え、四方の士を率い、上下の力を専らにして（札記：鮑は「方」の下に「之」の字を補い、「士」の下に「專」の字を補う）、以て勁吳を禽にして、霸功を成す。勾踐終に倍（王念孫により、「棓」を「倍」に改める）きて之を殺せり。此の四子は、功を成して去らず、禍い此こに至れり。此れ所謂信びて詘すること能わず、往きて反ること能わざる者なり。范蠡は之を知り、超然として世を避け、長く陶朱と為れり。君獨り愽（博の俗字、博打）する者を觀ずや。或は大いに投ぜんと欲し（姚校：一本「分」の字無し），或は功を分かたんと欲す。此れ皆な君の明らかに知る所なり。今、君は相として、計りて席を下らず、謀りて廊廟を出でず、坐して諸侯を制し、利、三川を施（うつす）し、以て宜陽に実たし、羊腸の險を決し、太行の口を塞ぎ、又范・中行の途を斬ち、棧道千里、蜀・漢に通じ（札記：鮑は「於」の上に「通」の字を補う）、天下をして皆な秦を畏れしむ。秦の欲得て、君の功極まれり。此れ亦た秦の功を分かつの時なり。是の如くにして退かずんば、則ち商君・白公・吳起・大夫種是れなり。君、何ぞ此の時を以て相印を歸し、賢者に讓りて之に授けざる。必ず伯夷の廉有りて、長く應侯と為り、世世孤を稱して、喬・松の壽有らん。禍を以て終るに孰れぞや。此れ則ち君何れにか居らん。」應侯曰く、「善し。」乃ち延き入れ坐せしめ上客と為す。後數日、入朝し、秦の昭王に言いて曰く、「客に新たに三東從り來る者、蔡澤有り、其の人辯士なり。臣の人を見ること甚だ衆きも、及ぶ者有る莫し、臣、如かざるなり。」秦の昭王、召して見て與に語り、大いに之を說び、拜して客卿と為す。應侯因りて病と謝し、相印を歸さんと請う。昭王彊いて應侯を起たしむ。應侯遂に篤しと稱し、因りて相を免ず。昭王、新たに蔡澤の計畫を說び、遂に拜して秦の相と為し、東のかた周室を收む。蔡澤、秦王に相たること數月、人或いは之を惡る。誅を懼れ、乃ち病と謝し、相印を歸す。號して剛成君と為す。秦に居（姚校：一本「居」の字有り）ること十餘年、昭王・孝文王・莊襄王に事（札記：鮑は「昭」の上に「事」の字を補う）え、卒に始皇帝に事え、秦の為に燕に使いす。三年にして燕、使太子丹をして入りて秦に質たらしむ。